総括

洪水を機に浮かび上がるタイ社会の本質
地域研究者による知的挑戦の記録

山本 博之　京都大学地域研究統合情報センター

災害とそれへの対応は、その地域社会のかたちを浮き彫りにする。災害は、その地域社会が被災前から抱えていた潜在的な課題を明らかにする。また、災害への対応には、危機や困難をどのように受け止め、どのように対応するかというそれぞれの社会に固有の姿があらわれる。基本的に平常時の状況をもとに研究している地域研究者にとっては、災害時にあらわれる姿から地域のかたちをどのように捉えるかは知的な挑戦でもある。

2011年のタイ洪水は、流出した水量や被災者数、経済的損失額などの点でタイ国でも最大規模の災害だったと言われるだけでなく、日本企業が進出する工業団地が広範囲に浸水したことが大きく報じられ、日本でも多くの人びとの関心を集めた。他方で、タイではチャオプラヤ川の氾濫による大規模な洪水はこれまでに何度も発生しており、バンコクもたびたび冠水した経験がある。大洪水に遭っても避難せず、冠水した市街地にとどまって日常生活を送っているバンコク市内の人びとの姿は、タイの人びとが古くから洪水と共存してきた様子を印象づけた。

本ワークショップでは、まず三つのセッションにより、水管理やバンコクの洪水対策史における位置づけ、バンコク居住者の生活への影響、タイ政府の対応などの観点から2011年のタイ洪水の諸相を検討した。総合討論では、タイ社会や災害を直接の専門としない研究者を交えて、それぞれの専門の立場から、2011年のタイ洪水を切り口に、タイの災害対応にあらわれるタイ社会のかたちについて考えた。

まず、セッションの流れに沿って各報告の内容を簡単に紹介したい（以下、敬称略）。

第1セッション　工学的視点から考察する2011年タイ洪水

第１セッションでは、工学的な見地から2011年の洪水を検討した。はじめに星川圭介によってタイにおける洪水の背景が報告された。星川報告はタイにおける洪水の概況がよく整理されているため、少し詳しく紹介したい。

バンコクとその周辺地域は、チャオプラヤ川の流域であるチャオプラヤ・デルタに位置している。チャオプラヤ川には主に六つの大きな支流があり、そのうち四つがナコンサワンで合流してチャオプラヤ・デルタに流れ込む。ナコンサワンの上流にはプミポン・ダムとシリキット・ダムという二つの大きなダムがあるが、肝心なことは、この二つのダムによってチャオプラヤ川の流量を抑えても洪水は発生するということである。

また、星川は、ダムの放水を決める「ルール・カーブ」について、カーブの上下の幅が大きかったために恣意や介入があるとの疑いを招きやすい設定であったことは認めながらも、工学的な視点から見ればダムの個々の放流操作に過失はなかったと結論づける。

2011年の洪水では、８月上旬にナコンサワン付近で冠水状態が悪化し、９月中旬には水が溢れはじめた。また、チャオプラヤ川の水位が高くなるとまわりの川からチャオプラヤ川に水が流れ込めず、合流地点で水が溢れはじめた。さらに、台風のためにナコンサワンより下流でチャオプラヤ川に合流するパーサック川の流量が激増し、パーサック川からチャオプラヤ川に流れ込む水の量が増えた。

これまで政府は、たび重なる洪水のため、堤防や輪中堤の建設、排水機場の設置、排水路の新設などの治水対策を行なってきた。しかし、政府の治水対策は、低いところから高いところへと排水しようとしたり、水路を分断する形で輪中堤を建設したりするなど、構造

■付表１　タイ政府系研究機関報告書による
2011年洪水被害

被災県	65県
死者・行方不明者	660名
被災者	4,039,459世帯／13,425,869名
全損家屋	2,329棟
一部損壊家屋	96,833棟
被害農地	1,120万ライ（1ライは0.16ヘクタール）
道路被害	13,961路線

http://www.thaiwater.net/current/flood54.html

■付表２　タイ工業相首相府付副広報官の発表による
工業団地の被害状況

被害額	2,296億バーツ
被災工場	7,506箇所（全工場8,413箇所の90%）
その他	● アユッタヤーとパトゥムターニーの大規模工業団地全7か所が一時閉鎖に追い込まれた。
	● 12月16日の時点で2,153事業者（合計投資額2,850億バーツ、従業員数1,770万人）が工業相の被災事業者向け補助金を受給した。

2011年12月19日付「株式・経営新聞」報道
http://www.kaohoon.com/online/27009/%CD%D8%B5%CF%E0%BC%C2%E2%C3%A7%A7%D2%B9%E0%CA%D5%C2%CB%D2%C2%A8%D2%A1%B9%E9%D3%B7%E8%C7%C1%C1%D9%C5%A4%E8%D2-2.3-%E1%CA%B9%C5%BA.-.htm

的な欠陥があった。その背景には、輪中堤の外に都市が急拡大したことがある。輪中堤の内側を守ろうとすれば輪中堤の外側の人たちを見捨てることになる。実際に、今回の洪水では輪中堤の外側の住民の不満が募り、土嚢で築いた臨時堤防が破壊されたり、「水門を開けろ」という抗議行動が起こったり、水門が破壊されたりした。

洪水後、政府とバンコク都は囲い込みを徹底化しようとし、これに対して輪中堤の外側の人びとから不安と不満の声が出たが、根本的な改善策は示されていない。ダム操作の規則の改定も行っているが、ダムが十全に機能したとしても洪水を防ぐことはできないために、抜本的な解決にはならない。また、中流域で32万ヘクタールの遊水地を確保したが、その効果は未知数である。政府やバンコクの対策では、堤外地の一般住民の問題に対する根本的な解決策は示されていない。

それでは、バンコク周辺は次に来る洪水に対応できるのか。星川の答えは否定的であり、その理由は、バンコクという都市域自体が洪水の流路を妨げて排水を遅延させているためである。バンコク周辺は、東側の土地が少し高く全体的に西側に水が流れる地形であり、西岸の堤防を増設すれば水が海に抜けなくなって、バンコク都心の北部や東岸はさらに危険な状況になる可能性がある。また、一般市民も個々に防水壁を作って水をせき止めており、都市化したデルタは非常に排水が行いにくい地域となっている。周辺都市が巨大化して西岸側の都市が拡がってしまっている現在、小手先の対応では解決できない。

続いて、岩城考信が歴史的な観点からタイの洪水を検討した。バンコク住民の伝統的な洪水対策は土盛りと高床化である。バンコクの洪水対策が現代のように変わるのは1960年以降である。土盛りや高床式住宅による小規模な減災のシステムから、流水路のコントロールなどの大規模に洪水から守る防災システムになった。

この背景には、人口増加による都市域の拡大と、それにともなう遊水地の減少がある。ロンスアンのシステムは、その土地の土をその土地で使うものだった。道路を増やすために水路が埋め立てられた。1909年の私的土地所有権の確立で、ロンスアンは途中で切られて機能しなくなった。高床式住宅や土盛りは、土地がたくさんあって人口が少ない世界で形成されたもので、都市の高密化あるいは近代化のなかで起こる土地の細分化にはうまく対応できない。

第２セッション　洪水は外国人労働者にどのような影響を与えたか

第２セッションでは、竹口美久が、2011年洪水がタイの外国人労働者に与えた影響について報告した。外国人労働者の対応は帰国と残留との二つに分かれたが、竹口によれば、大洪水が外国人労働者に大きな影響を与えたとは言えない。短期的には帰国したり残留したり、どうやって食べていくのかという困難な状況に置かれたことは確かだが、帰国した場合も復職できなかった人は少ないし、数の面で見ても外国人労働者が激減したということはなかった。

この報告に対して出された論点として興味深いのは、外国人労働と水との共通点についての指摘である。両者にはタイ社会にとって恵みと災いの両方の側面がある。すなわち、必要なときもあるし必要でないときもある。必要ではないときにあると困るし、必要なときでもありすぎると困る。あるいはうまく管理できないと困る。このような観点から、外国人労働者と水を比べて捉える視点が提案された。

第3セッション／総合討論　洪水対応に見るタイ王室と政府の変容

第３セッションで、玉田芳史は「洪水は災いなのか恵みなのか」と問いかけた。歴史的に言えば、タイ社会にとって洪水は恵みであって災いではない。タイは水と共存してきた社会だが、水を邪魔者だとみなす人びと、産業、社会が出てきたために、水を厄介者とみなす人が増えてきた。日本にとって今回の洪水が大問題だったのは七つの工業団地が水に沈んだためだが、ここは洪水の危険性が高く、浸かってしまうと水深が２、３メートルになるのはあたりまえの地域である。

また、玉田は、タイ国内ではダムの管理がまずかったという意見が多いことを紹介したうえで、このことをタイの内政と絡めて紹介した。バンコクの水の管理の責任は農業大臣にあるが、現在の農業大臣は元灌漑局長であり、今回の洪水でも更迭されなかった。このことから玉田は、バンコク周辺を洪水にすることで別のものを洪水から守ったと理解する。バンコク周辺を犠牲にして守ろうとしたものについて、タイは王室を中心とする国であり、バンコク中心部には王室の土地が多くあることが指摘された。

続く水上祐二の報告によれば、タイでは「洪水からバンコクを守るためにほかの地域が犠牲にされた」という言説が流布したという。水上はさらに、洪水はインラック政権の打倒を企てる王室に近い貴族エリート層が仕組んだ「クーデター」ではないかとの見方を示した。水上は、インラック政権の洪水対応にミスが目立ったことは確かだが、インラック政権が意図的に洪水を悪化させようとしたわけではなく、タイの政情が明確な意思決定をしにくくさせたことが背景にあるとする。すなわち、政府は政府内外のさまざまな対立軸と利害関係のなかに置かれ、工業団地や商業地、住民のどれを優先するのか、どの地域を水に沈めてどの地域を守るのかなど、常にジレンマに直面していた。なお、インラック政権は洪水対策の不手際から人気が低落したが、政権が倒れるには至らなかったことから、水上は、大洪水を契機として王党派とインラック政権の和解が成立し、王党派がインラック政権を支持する側にまわったと結論づけている。

総合討論では、以下のいくつかの論点が出された。前近代の東南アジアでは洪水は両義的なもので、災害とは受け止められていなかった。洪水とは仲良くつきあった方がはるかにいろいろな活力が生まれるのであって、それを邪悪なものとして対応すると袋小路に入って解決策が出てこない。

2006年にバンコクの西側のバーンラカムで洪水が起こったとき、コミュニティのリーダーたちがローカルな次元で洪水対処計画を作った。このとき政府の助けを待っていても何も得られないとわかったという話がある。王室が庇護すべきで、庇護されるからには我慢するといった構図に対して、現在タイは変わってきているのではないか。

タイは、やり直しやくりかえしが可能な社会という特徴があるように思われる。玉田氏はその裏側で国王がそういう状況を支えていると言うが、くりかえしを支える仕組みには、王の裁定のほかに「矛盾があったときには外に出す」というパターンがあったのではないか。外国人労働者や企業の話がそれにあたる。

水面に映るタイ社会――修復を前提にした社会か矛盾を流し去る社会か

以上の三つのセッションと総合討論の内容を筆者なりにまとめてみたい。

2011年のタイ洪水は、なぜこれほどの大きな被害をもたらしたのか。星川と岩城の報告からは、背景にタイの土地利用をめぐる大きな変化があったことが洪水被害を拡大させたことがうかがえる。

かつてタイでは、洪水時の水を広い範囲で薄く受け止めることで洪水が災害になることを避ける仕組みがあった。しかし、①バンコクが拡大すると同時に都市の形態が変化したこと、②商品作物の生産が増え、水田のような冠水を前提にした農地ではなく「乾いた農地」が拡大したこと、③工業団地が拡大したことの三つにより、洪水に備えた遊水空間が、洪水による浸水を避けるべき空間にとってかわられた。洪水時にも浸水しない土地を確保するために各地で堤防や輪中が造られた結果、タイ全体で見たときに洪水時の排水がうまくできなくなった。

バンコクはタイ国土の水が北から南へ流れて海に至る手前に位置し、バンコクを堤防で取り囲んで浸水を防ごうとすれば、バンコク北部から流れ込んできた水が周辺に溢れ出すだけでなく、結果的にバンコク市内にも水が流れ込む状況にあった。

本ワークショップでは、政府やバンコク都による治水対策が実際にどの程度効果的だったかという議論と、洪水でバンコクとその周辺が水浸しになったことをタイ社会がどのように受け止めたのかという議論とが、相互に間合いを取りながら絡みあっている様子が見られた。ダムの放水管理をはじめとする政府の治水対策について、星川らが論じるように、工学的にその有効性や適切さを評価するならば、今般の洪水は人的な失策であるとは言えない。バンコク都市圏の拡大や土地利用の変化が見られるなかで、ダムや堤防や排水路を通じた排水管理で対応できる状況にはなく、バンコクとその周辺の冠水はダムの治水管理に失敗したためとは言えない。その一方で、玉田らの議論にあるように、タイの人びとは、このたびの洪水被害は政治がうまく機能しなかったために発生した人災であると受け止めている。

この、実際にどのようにして事象が生じたかという意味での「現実」と、それを人びとがどう受け止めるかという「リアリティ」との間の大きな隔たりは、今回のタイ洪水の一つの特徴であると言えるだろう。工学的見地からは、ダムの治水管理を混乱した政治の問題と結びつけるタイ社会のリアリティは現実を見誤っている。他方で人びとのリアリティを重視する立場からは、人びとの考え方や行動を左右するのは人びとの事態の受け止め方であり、洪水の被害が何によって拡大したかを工学的に正しく把握するだけでは人びとの行動を理解できない。本ワークショップでは、さまざまな分野の専門家が一堂に会することで、実際の洪水被害拡大の要因を把握し評価するのと同時に、それを人びとがどのように受け止めていたかを整理することができた。

洪水被害を治水によって回避できなかったという事実と、洪水被害の拡大を政治の混乱のためだと人びとが理解したという状況とは、いわば現実とリアリティとが互いににらみあっている状況である。タイの洪水を巡る状況がこのような特徴をもっていることの背景として、この「にらみあい」という台風の目としての王室の存在が示唆された。

総合討論では、以上の議論を踏まえて、災害を通じて立ちあらわれる「タイ社会のかたち」をどう捉えるかが議論された。そこでは、「タイ社会のかたち」の捉え方がいくつか提出された。タイ社会は王室のまわりに作られていること。王都であるバンコクは修復を前提にした社会であること。また、タイは問題があればそれを都の外に排出して調節する社会であること。このようなタイ社会の特徴を、「矛盾を外部に流していく社会」とする見方や、「修復を前提にした社会」とする見方が検討された。この二つは一見すると異なる特徴であるようにも見えるが、実際は同じ社会の表の側面と裏の側面を見ているのかもしれない。